

報 告

3歳児健康診査におけるフォローアップ児の特徴に関する研究

— 1歳6か月児健康診査, 3歳児健康診査時における
問診票と簡易発達検査との関連 —

本郷 一夫¹⁾, 八木 成和²⁾, 糠野 亜紀³⁾

〔論文要旨〕

本研究は, 3歳児健康診査におけるフォローアップ児の特徴を明らかにすることを目的とした。414名の縦断的データに基づき, 1歳6か月児健康診査と3歳児健康診査の問診票および簡易発達検査の各得点を説明変数, 3歳児健康診査後のフォローアップ児群と非フォローアップ児群の2群を従属変数とする判別分析を行った。その結果, フォローアップ児を抽出する基準としては, 1歳6か月児健康診査の問診票の「運動」と「言語」(とりわけ理解), 3歳児健康診査の問診票の「運動」と「言語」, 3歳児健康診査の簡易発達検査の各項目が有効であることが示された。しかし, 問診票の「対人関係」領域の項目はいずれの時点でもフォローアップ児の抽出には影響が少ないことが明らかになった。今後, 問診票や簡易発達検査の結果からだけではなく行動観察による資料などを加えて, カンファレンスを通して総合的に判断し, フォローアップ児を抽出し, 支援していくことの重要性が示唆された。

Key words : 3歳児健康診査, 1歳6か月児健康診査, 簡易発達検査, 問診票, 判別分析

I. はじめに

一般に, 乳幼児健康診査(以下「健診」と略す)の目的として, ①疾病・異常の早期発見・早期対応, ②育児支援・健康推進の援助・助言, ③成長・発達の評価と保健指導があげられる。このうち, 3歳児健診の時期には, 発達の遅れや子どものもつ問題が一層明確になってくる。したがって, この時期には, 第1に発達の遅れや子どものもつ問題への支援という視点からの健診が重要となる。第2に, 疾病・異常の早期発見につながる発達アセスメントの開発が必要

となる。このような観点から, 問診票の項目の構成や発達検査の項目の検討がなされてきた¹⁾。しかし, 3歳児健診の時点では, 子どもの特徴が何らかの疾病・異常に基づくものなのか, 子どもを取り巻く環境の影響であるのか, それとも発達のバリエーションの一つであるのか的確に判断するのが難しいケースも少なくない。そのような場合, その後の経過観察の中から子どもの発達ニーズを捉え, 子どもと子どもを取り巻く人々に対して支援していくことが必要となる。

それでは3歳児健診時のどのような情報に基

The Research on Follow-up Children's Feature in Health Checkup for 3-year-old Children

[1827]

Kazuo HONGO, Shigekazu YAGI, Aki KONO

受付 06. 5.15

1) 東北大学大学院教育学研究科(研究職)

採用 06. 9.12

2) 四天王寺国際仏教大学人文社会学部教育学科(研究職)

3) 常磐会短期大学幼児教育科(研究職)

別刷請求先: 本郷一夫 東北大学大学院教育学研究科 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内27番1号

Tel/Fax: 022-795-6138

づいて、経過観察を必要とする子どもを抽出すればよいのであろうか。多くの自治体では、3歳児健診終了後のカンファレンスにおいて、問診票、発達検査、行動観察などの結果を総合的に判断して、経過観察の対象児を抽出することが多いと思われる。しかし、その際、いくつかの問題がある。第1に、問診票は子どもの日常的な姿を表していると考えられる。しかし、子どもの発達に関する保護者の認識が十分ではない場合、適切な情報源とはなり得ないという問題がある。したがって、問診票の情報だけに頼っていると早期発見が難しい場合もある。第2に、個別に実施される発達検査は、子どもの状態を直接捉えることが可能である。しかし、その反面、その日の子どもの状態によって結果が影響を受けやすいという問題がある。したがって、3歳児健診の問診票、簡易発達検査ともに子どもの発達を理解するうえで重要な指標には違いないが、単独では決定的な指標とはなりえない。

また、そもそも子どもの発達状態は、その時点での子どもの特徴にとどまらず、1歳6か月児健診の結果等から子どもの発達の経過を踏まえて理解される必要があると考えられる。実際、3歳児健診では、以前の年齢の発達との関連からフォローアップについて考えることが重要であることが示唆されている²⁾³⁾。特に、4か月児健診や1歳6か月児健診などとの関連が指摘されている^{4)~8)}。加えて、子どもの発達を多角的に捉えるためには、健診に関わるものがカンファレンスを通してフォローアップしていくことが重要であると指摘されている^{9)~11)}。

II. 目 的

本研究では、3歳児健診後のカンファレンスで経過観察が必要であると判断された子どもは、健診時にどのような特徴をもっているのかを明らかにすることを目的とした。

III. 研究 方法

1. 調査対象

A市で1996年4月から1997年3月までの間に1歳6か月児健診を受診した583名のうち、1998年4月から1999年3月までの間に3歳児健診を受診した児は451名であった。このうち、寝る、

ぐずるなどの理由で簡易発達検査を受けていない児を除いた414名を分析対象とした。

2. 調査方法および調査内容

以下の項目を分析対象とした。

- (1) 1歳6か月児健診問診票の「運動」、「視覚」、「聴覚」、「言語」、「対人関係」、「その他」の6領域30項目（各領域5項目）¹²⁾。
- (2) 1歳6か月児健診時の簡易発達検査（2課題）。①新版K式発達検査¹³⁾を参考にした「積み木の塔」課題、②「絵指示」課題。このうち、「絵指示」課題は、4つの絵から指定した絵を1つ指さしする課題であった¹⁴⁾。
- (3) 3歳児健診問診票の「運動」、「ことば・発語」、「ことば・理解」、「対人関係」、「社会性」、「その他」の6領域30項目（各領域5項目）。
- (4) 3歳児健診時の簡易発達検査（5課題）。①自分の姓名と性別を述べる「姓名・性」課題、②3つの積み木を使って、車に見立てる「見立て」課題、③複数の形の中から1つの形を選ぶ「形の弁別」課題、④2本の線分のうちどちらが長いかを選択する「長短比較」課題、⑤6つの絵の名称を述べる「絵の名称」課題。

3. 分析方法

3歳児健診の簡易発達検査の実施後、問診票、簡易発達検査、行動観察の結果を総合的に判断し、フォローアップ児33名を抽出した（以下、F群）。抽出されなかった残り381名の児を非フォローアップ児とした（以下、非F群）。群別の属性は表1に示す通りである。

4. 倫理的配慮

本研究に先立ち、市の保健課と協力して乳幼児健診を改善していくこととなった。調査研究者は非常勤の市の心理判定員として乳幼児健診の改善にかかわり、カンファレンスにも参加することとなった。

資料の分析に当たっては、特定の個人的情報が漏洩しないように、情報はコード化し、統計学的に処理したうえで個人が問題とならないよ

表1 属性別対象者数

人(%)

		全 体 (n=414)	非フォローアップ群 (n=381)	フォローアップ群 (n=33)
性	男 児	216(52.2)	192(50.4)	24(72.7)
	女 児	198(47.8)	189(49.6)	9(27.3)
月 齢	40か月以下	3(0.7)	2(0.5)	1(3.0)
	41か月	134(32.4)	127(33.3)	7(21.2)
	42か月	248(59.9)	224(58.9)	24(72.8)
	43か月以上	29(7.0)	28(7.3)	1(3.0)
出生順位	第1子	209(50.5)	194(50.9)	15(45.6)
	第2子	147(35.5)	136(35.7)	11(33.3)
	第3子	51(12.3)	45(11.8)	6(18.1)
	第4子	7(1.7)	6(1.6)	1(3.0)
集団生活経験の有無	経験あり	271(65.5)	243(63.8)	28(84.8)
	経験なし	143(34.5)	138(36.2)	5(15.2)

うにした。

Ⅳ. 結 果

1. 1歳6か月児健診の間診票と簡易発達検査の分析

1歳6か月児健診の間診票の30項目の通過率を2群別に表2に示した。各項目について、「ハイ」と回答した場合を通過と見なし1点を与え、「イイエ」と回答した場合を0点とした。なお、逆転項目は、9項目であった。 χ^2 検定の結果、有意差が見られた項目は、8項目であった。

次に、簡易発達検査の各課題の得点化を行った。「積み木の塔」課題については、積めた積み木の数が1個以下の場合0点、2～3個の場合1点、4～5個の場合2点とした。「絵指示」課題については、正解した数が2問以下の場合0点とし、3～4問の場合1点、5～6問の場合2点とした。

課題ごとの得点分布を群別に表3に示した。 χ^2 検定の結果、「積み木の塔」課題では1%水準で有意差($\chi^2=23.2$, $df=2$)が見られたが、「絵指示」課題では有意差は見られなかった。

2. 3歳児健診の間診票と簡易発達検査の分析

3歳児健診の間診票の30項目の通過率を群別に表4に示した。各項目について、「ハイ」と回答した場合を通過と見なし1点を与え、「イイエ」と回答した場合を0点とした。逆転項目は7項目あった。 χ^2 検定の結果、13項目にお

いて有意差が見られた。

簡易発達検査の各課題の得点化を行った。「姓名・性」課題は、正解した数が1問以下の場合0点、2問の場合1点、3問の場合2点とした。「見立て」課題は、できなかった場合0点、検査者から追加の指示があったときにできた場合1点、試行錯誤しながらあるいはスムーズにできた場合2点とした。「形の弁別」課題は、正解した数が1問以下の場合0点、2～3問の場合1点、4～5問の場合2点とした。「長短比較」課題は、正解した数が1問以下の場合0点、2問の場合1点、3問の場合2点とした。「絵の名称」課題は、正解した数が2問以下の場合0点、3～4問の場合1点、5～6問の場合2点とした。

課題ごとの得点分布を2群別に表5に示した。 χ^2 検定の結果、5つの課題すべて1%水準で有意差が見られた(「姓名・性」課題 $\chi^2=54.5$, $df=2$;「見立て」課題 $\chi^2=72.2$, $df=2$;「形の弁別」課題 $\chi^2=105.3$, $df=2$;「長短比較」課題 $\chi^2=80.6$, $df=2$;「絵の名称」課題 $\chi^2=127.6$, $df=2$)。

3. 判別分析による要因の分析

1歳6か月児健診の間診票、簡易発達検査、3歳児健診の間診票および簡易発達検査の結果がこの2群の児の違いにどのように関連しているのかを正準判別分析を用いて検討した。具体

表2 1歳6か月児健診問診票の分析対象30項目の群別の通過率

項 目 (ただし、#の付いた項目は逆転項目を示している。)	非フォローアップ群 n=381	フォローアップ群 n=33	χ^2
「運動」領域			
1 平地ならば、すぐ転んだり、尻もちをついたりせずにあるけますか。	96.3	90.9	
2 手をひくと階段を昇ることができますか。	94.5	75.8	**
3 鉛筆を持ってなぐりがきをしますか。	99.2	90.9	**
4 積み木を二つ三つ積み重ねることができますか。	91.1	81.8	*
5 スプーンやフォーク等使って食物を口へ運べますか。	94.8	87.9	
「言語」領域			
6 絵本を見ながら何かしきりに言っていますか。	94.0	93.9	
7 「ブーブーはどこ」、「パパはどこ」などとたずねると、そちらを見たり、指さしたりしますか。	97.1	87.9	*
8 「ブーブー」、「マンマ」など意味のある片言をいいますか。	97.4	93.9	
9 「新聞を持ってきて」など、言葉だけの簡単ないつけを実行できますか。	96.3	75.8	**
10 「メ」、「クチ」、「ミミ」など、たずねると指させますか。	79.5	51.5	**
「対人関係」領域			
11 身近な人のしぐさのまねができますか。	98.4	93.9	+
12 話しかけると目をあわせますか。	99.7	100.0	
13 相手になって遊んでやると喜びますか。	99.7	100.0	
14 子どもの中にまじって、ひとりで機嫌よく遊びますか。	92.7	84.8	+
15 親または家族がいてもいなくても無頓着ですか。#	92.7	97.0	
「視覚」領域			
16 よく見えていると思いますか。	99.7	100.0	
17 目つきや目の動きが悪いと思いますか。#	98.2	93.9	
18 極端にまぶしがりますか。#	97.9	100.0	
19 ものを見る時、目を細めますか。#	99.2	97.0	
20 斜視と言われたことがありますか#	99.0	97.0	
「聴覚」領域			
21 こちらの話しかけに応じないので、耳が悪いのかと心配したことがありますか。#	96.1	97.0	
22 小さな声で呼んでも振り向きますか。	97.1	97.0	
23 車のクラクションやパトカー・救急車など遠くの音に気づきますか。	95.8	93.9	
24 隣の部屋（子どもから見えない所）から身近な人が呼ぶと、返事をしたり、来たりしますか。	100.0	93.9	**
25 電話が鳴ると、指さしたり、電話のところへ行ったりしますか。	94.5	90.9	
「その他」領域			
26 理由もなく、奇妙な発声をしますか。#	88.7	90.9	
27 特定のものがなくなるとひどく機嫌が悪くなりますか。#	72.2	60.6	+
28 服を着替えさせるとき、自分からその姿勢をとりますか。	94.0	69.7	**
29 よく寝ますか。	90.8	93.9	
30 困った行動やくせがありますか。#	65.6	66.7	

ただし、**：p<.01，*：p<.05，+：p<.10である。

的には、1歳6か月児健診の問診票の6領域の各得点、簡易発達検査の2つの課題の各得点、3歳児問診票の6領域の各得点および簡易発達検査の5つの課題の各得点を説明変数として、この2群を従属変数とする分析であった。なお、1歳6か月児健診の問診票の領域別の平均値(SD：幅)は、「運動」4.72(.63)、「言語」4.59

(.79)、「対人関係」4.83(.40)、「視覚」4.94(.33)、「聴覚」4.83(.51)、「その他」4.09(.91)であった。3歳児健診の問診票の領域別の平均値(SD)については、「運動」4.87(.37)、「ことば・発語」4.53(.91)、「ことば・理解」4.78(.54)、「対人関係」4.93(.28)、「社会性」4.73(.59)、「その他」3.78(.92)であった。判別分析にはSPSS

表3 1歳6か月児健診簡易発達検査の2課題の群別の得点別分布

(人数; %)

得点	「積み木の塔」課題		「絵指示」課題	
	非フォローアップ群	フォローアップ群	非フォローアップ群	フォローアップ群
0点	26(6.8)	9(27.3)	208(54.6)	23(69.7)
1点	158(41.5)	18(54.5)	118(31.0)	8(24.2)
2点	197(51.7)	6(18.2)	55(14.4)	2(6.1)
合計	381(100.0)	33(100.0)	381(100.0)	33(100.0)

表4 3歳児健診問診票の分析対象30項目の群別の通過率

項 目 (ただし、#の付いた項目は逆転項目を示している。)	非フォローアップ群 n=381	フォローアップ群 n=33	χ^2
「運動」領域			
1 20～30cmの高さからとびおることができますか。	99.7	93.9	*
2 片足で立つことができますか。	95.5	84.8	*
3 足を交互に出して階段を昇れますか。	98.4	100.0	
4 鉛筆・クレヨンできれいなマルをかくことができますか。	97.6	97.0	
5 ハサミを使って紙を切ることができますか。	98.2	87.9	**
「ことば・発語」領域			
6 話しことばがおかしい(おかれている)と思いますか。#	93.2	72.7	**
7 「パパ カイシャ イッタ」など簡単なおしゃべりができますか。	99.7	90.9	**
8 自分の氏名が言えますか。(例 トクシマ・ハナコ)	97.9	66.7	**
9 発音がはっきりしなかったり、何を言っているのかわからないことがありますか。#	77.4	57.6	*
10 男の子か女の子か尋ねたときに正しく答えられますか。	92.1	75.8	**
「ことば・理解」領域			
11 周囲の会話を理解できますか。	99.5	100.0	
12 「大きい/小さい」といった言葉の意味がわかりますか。	98.7	81.8	**
13 「長い/短い」といった言葉の意味がわかりますか。	92.9	66.7	**
14 「～はどこ」と尋ねると言葉や指さしてその場所を示しますか。	100.0	100.0	
15 「赤・青・黄・緑」がわかりますか。	91.9	75.8	**
「対人関係」領域			
16 子ども同士で遊んでいますか。	96.6	93.9	
17 ごっこ遊び(電話ごっこ、ままごと等)をしますか。	99.7	97.0	
18 自分で作りたいのにできないとき、親や周りの人に「作って」と言いますか。	99.2	100.0	
19 相手の目を見て会話ができますか。	99.0	100.0	
20 表情が乏しいと感じることがありますか。#	99.2	93.9	+
「社会性」領域			
21 はしやスプーンを使って食事をするができますか。	99.2	97.0	
22 簡単なあいさつができますか。	97.6	100.0	
23 簡単な服は脱いだり着たりできますか。	99.2	97.0	
24 うがいをする時、飲みこまないでブクブクができますか。	94.5	84.8	*
25 顔をひとりで洗いますか。	84.0	69.7	*
「その他」領域			
26 最初の音がつまったり、くり返したりすることがありますか。#	86.1	84.8	
27 自分の興味のあることに集中できますか。	99.0	100.0	
28 気になるくせがありますか。#	64.0	69.7	
29 新しい場面や物には、すぐになじめないところがありますか。#	56.2	45.5	
30 絶えず動き回り、どこかに勝手にいってしまうことがありますか。#	72.4	75.8	

ただし、** : $p < .01$, * : $p < .05$, + : $p < .10$ である。

表5 3歳児健診簡易発達検査の5課題の群別の得点別分布

(人数; %)

得点	「姓名・性」課題		「見立て」課題		「形の弁別」課題		「長短比較」課題		「絵の名称」課題	
	非フォローアップ群	フォローアップ群	非フォローアップ群	フォローアップ群	非フォローアップ群	フォローアップ群	非フォローアップ群	フォローアップ群	非フォローアップ群	フォローアップ群
0点	48 (12.6)	20 (60.6)	23 (6.0)	17 (51.5)	4 (1.0)	12 (36.4)	11 (2.9)	13 (39.4)	5 (1.3)	9 (27.3)
1点	57 (15.0)	6 (18.2)	12 (3.1)	1 (3.0)	15 (3.9)	3 (9.1)	32 (8.4)	6 (18.2)	10 (2.6)	11 (33.3)
2点	276 (72.4)	7 (21.2)	346 (90.8)	15 (45.5)	362 (95.1)	18 (54.5)	338 (88.7)	14 (42.4)	366 (96.1)	13 (39.4)
合計	381 (100.0)	33 (100.0)	381 (100.0)	33 (100.0)	381 (100.0)	33 (100.0)	381 (100.0)	33 (100.0)	381 (100.0)	33 (100.0)

表6 1歳6か月児健診問診票6領域の判別分析結果

	標準化された正準判別 関数係数
「運動」領域	.573
「言語」領域	.605
「対人関係」領域	-.006
「視覚」領域	.126
「聴覚」領域	-.097
「その他」領域	.186

13.0Jが用いられた。

判別分析の結果, 1歳6か月児健診の問診票6領域では固有値.073, ウィルクスの Λ .932 ($p < .001$), 簡易発達検査2課題では固有値.060, ウィルクスの Λ は.944 ($p < .001$)であった。3歳児健診の問診票6領域では固有値.149, ウィルクスの Λ は.871 ($p < .001$), 簡易発達検査5課題では固有値.841, ウィルクスの Λ .543 ($p < .001$)であった。いずれも2群間に差があることが示された。

正しく分類された割合は, 1歳6か月健診の問診票6領域では414名中80.0%, 簡易発達検査では414名中59.4%であった。3歳児健診の問診票6領域では414名中82.4%, 簡易発達検査では414名中94.0%であった。なお, 1歳6か月児健診の簡易発達検査では, 正しく分類された割合が低かったため, 以後の分析から除外した。

表6には, 1歳6か月児健診の問診票6領域の標準化された正準判別関数係数が示されている。ここから「運動」領域の得点(.573)と「言語」領域の得点(.605)の2つの変数が2群間の分類に大きく影響していることが示された。

表7 3歳児健診問診票の6領域の判別分析結果

	標準化された正準判別 関数係数
「運動」領域	.264
「ことば・発語」領域	.492
「ことば・理解」領域	.555
「対人関係」領域	.056
「社会性」領域	.089
「その他」領域	-.106

表8 3歳児健診簡易発達検査の5課題の判別分析結果

	標準化された正準判別 関数係数
「姓名・性」課題	.148
「見立て」課題	.344
「形の弁別」課題	.430
「長短比較」課題	.227
「絵の名称」課題	.574

表7には, 3歳児健診問診票6領域の標準化された正準判別関数係数が示されている。ここから「ことば・発語」領域の得点(.492)と「ことば・理解」領域の得点(.555)の2つの変数が2群間の分類に大きく影響していることが示された。さらに, 「運動」領域の得点(.264)も2群間の分類に影響していることが示された。

表8には, 3歳児健診簡易発達検査5課題の標準化された正準判別関数係数が示されている。「絵の名称」課題の得点(.574)と「形の弁別」課題(.430)の2つの変数が特に2群間の分類に大きく影響していた。また, 「見立て」

課題の得点 (.344) と「長短比較」課題の得点 (.227) の変数も 2 群間の分類に影響していることが示された。

V. 考 察

1 歳 6 か月児健診問診票の項目では「運動」領域と「言語」領域が影響していた。特に「言語」領域では、可逆の指さし、簡単な言いつけの実行、身体部分への指さしといったように発語そのものよりも相手の働きかけの理解と理解に基づく行動に関連する項目が影響していた。

簡易発達検査では、「積み木の塔」課題で有意差が見られた。一方、「絵指示」課題では、有意差が見られなかった。これは課題自体が 1 歳 6 か月児では難しかったことが関係していると考えられる。実際、非 F 群で 54.6%、F 群で 69.7% が 0 点であった。今後、課題内容や得点化の方法について検討する必要があると考えられる。

3 歳児健診問診票の項目では、「ことば・発語」領域、「ことば・理解」領域、「運動」領域、「社会性」領域が影響していた。

3 歳児健診時の簡易発達検査では、5 つの課題すべてで有意差が見られた。5 つの課題の 0 点の人数割合を 2 群間で比較してみると、すべての課題で F 群の人数割合が高く、3 歳児健診におけるフォローアップ児の抽出に簡易発達検査の結果が影響していることが示唆された。

次に、判別分析の結果から、2 群を分類する要因として、以下のような要因が見出された。1 歳 6 か月児健診の問診票では、「運動」領域と「言語」領域が影響していた。問診票の「運動」領域の項目はさらに、移動運動と手と指の運動に分けられる。表 2 に示される通過率から考えると、1 歳 6 か月時点での「運動」領域については、身体のバランスや手指の巧緻性が後の発達を予測するうえで重要だと考えられる。また、「言語」領域のうち、可逆の指さしの重要性はこれまでも指摘されている⁴⁾。これらは後の発達を予測するうえで重要な指標となることが改めて確認されたといえよう。

3 歳児健診問診票では、「運動」、「ことば・理解」、「ことば・発語」の 3 つの領域の得点が、F 群の児の抽出に影響を与えていた。この傾向

は、1 歳 6 か月児健診の問診票の領域と同様であった。表 4 に示される通過率から「ことば・発語」領域の項目はいずれも弁別力があることが示唆される。また、「ことば・理解」領域でも 5 項目中 3 項目において通過率に差があることから、1 歳 6 か月児健診の問診票の項目と同様に引き続き重要な要因になっていると考えられる。

ただし、問診票に示される項目の内容がいくら妥当性の高いものであっても、保護者の認識を媒介しているため、子どもの実態を反映しない場合もあると考えられる。フォローアップ児を抽出するうえで注意しておく必要があるだろう。

3 歳児健診の簡易発達検査の「絵の名称」課題、「形の弁別」課題、「見立て」課題の得点が影響していることが示された。「絵の名称」課題は示された絵を答える課題である。3 歳児でこの課題ができない場合、発語の問題と絵の識別の問題が考えられる。また、絵の識別の問題は「形の弁別」課題の結果と関係していると考えられ、言語そのものの問題と同時に認識の問題が関係していることが示唆される。

さらに、「見立て」課題は、検査者が車を積み木で作ったものを模倣して作り、動かして競争する課題であった。この課題では、模倣できることと検査者とイメージを共有して「ごっこ」遊びができることが問題となる。1 歳 6 か月児健診の「積み木の塔」課題も前述のように模倣と関連している。その点で、模倣の有無もその後の経過観察児の抽出においては重要であると考えられる。

一方、1 歳 6 か月児健診においても 3 歳児健診においても問診票の「対人関係」領域に含まれる項目で有意差の認められた項目はなかったという点も注目に値する。行動観察を実施すれば、非 F 群と F 群で対人関係場面での行動の違いを見出すことができるかもしれない。しかし、保護者、とりわけ母親は、子どもとの日常的な相互作用の中で十分なやりとりができていて認識していることが多く、問診票という形では子どもがもつ対人関係の微妙な側面は捉えにくいと考えられる。

以上のことから、1 回限りの 3 歳児健診に

よって子どもの発達上の問題を完全に把握するには限界があることが示唆される。フォローアップ児を抽出し、経過観察をしていくことで子どもとその保護者への支援が可能になる。カンファレンス時に問診票や簡易発達検査の結果に加えて、各種の検査や面接の順番を待っている間の子どもの行動、簡易発達検査や面接時の子どもの様子など、子どもの行動観察の結果も参考にして総合的に判断し、フォローアップ児を抽出することが重要である。

最後に、本調査にご協力をいただきました皆様に心より感謝申し上げます。

本稿の内容の一部は、第11回日本発達心理学会(2000, 東京)にて発表した。

文 献

- 1) 本郷一夫, 八木成和, 糠野重紀. N市の3歳児健診の改善を目指した問診票の改訂に関する研究. 東北大学大学院教育学研究科教育ネットワーク研究室年報. 2004; 4: 28-36.
- 2) 宮尾益知. 3歳児のフォローアップ. 前川喜平, 山口規容子. 育児支援とフォローアップマニュアル. 東京: 金原出版, 1999: 39-48.
- 3) 中川信子. 健診とことばの相談. 第3版. 東京: ぶどう社, 1999.
- 4) 湯本正美, 吉川領一, 日詰恵里子. 乳幼児健診の発達評価項目の再検討—コミュニケーション障害児の早期発見のために. 作業療法. 1997; 16: 211.
- 5) 高田知英子. 1歳6か月児健診で有意語の遅れた児の検討—3歳時点での評価. 鳥取医学雑誌. 1983; 11(2): 161-166.
- 6) 小田 昇, 阿部和彦. 3歳児健診時に発達性の言葉の遅れを示した児の追跡調査—予後の予測における多動傾向の意義. 精神医学. 1990; 32(4): 391-394.
- 7) 福田登美子, 玉井ふみ, 武内和弘, 他. 乳幼児健診の発達評価項目の再検討—コミュニケーション障害児の早期発見のために. 人間と科学. 2005; 5(1): 53-65.
- 8) 腰川一恵. 地域支援システムにおける乳幼児健診とフォローアップ体制. 発達障害支援システム学研究. 2003; 3(1): 39-44.
- 9) 原 仁. 就学前のフォローアップ. 前川喜平, 山口規容子. 育児支援とフォローアップマニュアル. 東京: 金原出版, 1999: 49-60.
- 10) 青木継稔. 乳幼児健診後の追跡・支援システム—フォローアップシステム. 小児内科. 1994; 26: 69-74.
- 11) 細淵富夫. 上田市における発達障害児の早期発見とその対応—乳幼児健診から事後指導への連携. 長野大学紀要. 1995; 17(3): 283-289.
- 12) 本郷一夫, 八木成和. 1歳6か月児健診の改善に関する研究—鳴門市における問診票の改訂について—. 鳴門教育大学研究紀要(教育科学編) 1995; 10: 221-230.
- 13) 生澤雅夫, 松下 裕, 中瀬 淳, 編著. 新版K式発達検査法. 第2版. 京都: ナカニシヤ出版, 1995.
- 14) 本郷一夫, 八木成和. 鳴門市の1歳6か月児健診の改善に関する研究—全受診児に対する「簡易発達検査」の導入結果を中心に—. 発達障害研究 1997; 19(1): 72-80.

[Summary]

The purpose of the present study was to examine the follow-up children's feature in health checkup for 3 years-old children. Based on 414 children's longitudinal data, discrimination analysis was conducted. The explaining variables were the scores of the interview sheets and the scores of developmental tasks in health checkup for 18-month children and 3 years-old children. The dependent variable was two of the follow-up child group and the non-follow-up child group after 3 years-old health checkup. As a result, the scores of "movement" and "language" of the interview sheets for 18-month-old children and 3 years-old children, and the scores of the developmental tasks were important for the standard which extracted the follow-up children. However, it became clear that the score of "personal-relations" did not function as the standard.

[Key words]

3-year-old, Health checkup, Check list, Discrimination analysis